

降誕祭主日礼拝説教

マタイによる福音書1章18節―25節

『神我らと共に』

ヨセフはマリアと婚約し、結婚をまぢかに控えた身でした。マリアとの新しい歩みを想像し、希望に胸膨らませていたのではないのでしょうか。

ところが彼は衝撃的な事実を知らされました。それはマリアの妊娠、という知らせでした。ヨセフにとってそれは全く身に覚えのないことでした。ということは、マリアがほかの男性との間で、妊娠した、ということになります。ユダヤでは婚約は法律的には、結婚と同じであり、マリアのしたことは、不倫ということになり、ユダヤの掟ではそれは死罪にあたることでした。

ヨセフは大きなショックを受けました。婚約して、結婚もまぢかというのに、相手が誰かもわからないままに妊娠の知らせ。ヨセフは悩み苦しんだと思います。

彼は正しい人だったと聖書は書き記しています。ユダヤ社会における正しさというのは、律法に叶った生活する人、という意味でした。しかしヨセフは、マリアのことを律法の掟に従い、石打の刑にしようとは思っていなかった。ヨセフは愛するマリアをそのような目に遭わせることもできず、悩み苦しみ、ひそかにマリアと縁を切ろうと決心するのです。ヨセフの正しさというのはだから、たんに律法に叶った生活ということではなく、相手への愛ゆえに、悩み苦しんでいく、そういうことを含めた正しさだったのです。

まさに苦渋の決断です。ヨセフはこの決心に至るまでに、幾夜も眠れぬ夜を過ごしたかもしれない。悩みの末の決心。ところが、ヨセフはこの決心を直ちに実行に移したわけではない。それどころか、20節を見ると、「このように考えていると」とあります。決心したにもかかわらず、このように考えていると、ということは彼は踏ん切り悪く思い巡らしていた、ということです。

彼は考えたに違いない。自分の決心は正しいかもしれない、だがそういう正しさだけで事は済むのか。マリアはいったいどうなるのか。生まれてきた子どもはどうなってしまうのか。婚約した後の離婚、それはユダヤ社会において、その女性が社会的に葬られた存在になってしまうことを意味しました。自分の決心はこれで正しいのかもしれない。しかし、これで本当に問題は片付いたと言えるのか。どうしてもそうは思えない。彼が「このように考えていると」とはそうしたあれこれではなかったのか。

ヨセフは事に当たって、自分の正しきで判断するすべを知っていました。しかしその正しさだけで事は済むのか、ということの前で立ち往生していたのです。いや立ち往生ではなく、蹲（うずくま）っていたのです。ヨセフは正しい人であった、しかし自分の正しさだけではどうにもならないことの前でうずくまっている、ということなのです。

そこで彼は夢を見たのです。

夢は聖書において、神が御心を示す手段でもあります。神はうずくまっているヨセフに向かって、言葉を語られるのです。

あるいはヨセフが、自分の正しさを信じ切る人で、その正しきで事を済ませる人であれば、夢は見なかったのではないか。マリアとさっさと縁を切ってしまう人であれば、ヨセフは夢を見ることもなく、天使の言葉も聞くこともなく、クリスマスの出来事の体験者となることもなかったのではないか。

ヨセフは、人生の不可解さ、の前で謙虚に蹲（うずくま）れる人だった。自分の正しさという中に入り込んでそれでよしとする人ではなく、むしろそこで右往左往する人だった。そして神はまさにその蹲るヨセフの心に語りかけられたのではないか。ヨセフはどうしたらいいのか、わからない。嬉しいはずの婚約の期間が、どこでどう歯車が狂ってしまったのか、最悪のことになっている。しかも、自分の手持ちの正しきで、事を裁断するわけにはいかない。しかし神の言葉は、その立ち往生するヨセフに語られるのです。

ヨセフは何を示されたのか。20節21節を読んでみます。「このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、おそれず妻マリアを迎えて入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

天使はマリアを妻として受け入れなさい、といます。

ヨセフは、マリアとひそかに離縁することで、問題を解決しようとしていました。しかし天使はそのマリアを迎え入れ、受け入れることが、この問題の向き合い方だ、というのです。さらに迎え入れた妻マリアが男の子を産む、その子が罪の救いを人々に与えるものなる、つまり問題を受け入れていくことがヨセフにとっても人々にとっても救いとなっていくというのです。

どうしてこの問題を受け入れることが救いとなっていくのか。それはこの生まれてくる子が、インマヌエル、神は我々と共におられる、という方だからだ、と天使は語る。つまり問題が解決するとか、なくなる、ということではなく、

どんな困難や大きな壁があるにせよ、神がそこにおられ、神が共におられる、ということの中で問題を担っていけるということなのです。

ヨセフがこれから経験していくのは、聖霊による妊娠、神の子の誕生、という前代未聞のことです。子供に名前を付けることはユダヤ社会において、親の大事な仕事の一つですが、それもすでに定められている。つまりヨセフは親として何一つできない。ただ、神の業を受け入れていく。この先どんな困難があるのか、まるで分らない。なぜよりによって自分たちが選ばれたのかもわからない。けれど、その子はインマヌエルと呼ばれる子なのです。つまりヨセフのこれからの歩みがどのような歩みになるにせよ、神は我々と共におられる、この子の存在そのものがインマヌエルなのだから、安心して、歩いていけばいい。マリアとヨセフは、まさにそのことを人生全体で経験していくことになるのです。

ヨセフの経験はきわめて特殊な、彼だけがした経験でありつつ、それはわたしたちの経験と重なっていくものです。

わたしたちは、程度の差こそあれ、何が何だかわからない問題にどこかで振り回されて生きているものです。たとえば。能力の問題、どうして生まれつき能力がこれほどに違うのか、という問題にぶつかっていない人はごくまれでしょう。もっとこの分野で能力があったら、と嘆くことすらあきらめざるを得ないほど、この問題に振り回されている。生まれたときから健康面の課題を負っている人もいれば、障害を抱えている人もいる。生まれる家庭を人は選択できない、ということは根本のところ、わたしたちは平等ではない、ということなのかもしれない。どうしてこうなんだ、なんという不公平なんだろう。自分の性格も自分ではどうしようもできない何かで形成されてきているのではないか。答えの出せない問題にずっと振り回されて生きているのです。

それは人間が宿命のようなものを負っている、ということもできますし、もっと言えばさまざまな限界づけの中で生きている、ということです。日本に生まれてきたことも、この時代に、この場所でこういう姿形で生まれてきたことも、我々は様々な限界づけの中で生きている。創世記の最初に、アダムとイブが「園の木からとって食べなさい。ただし善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。」といわれたように、神は人間に限界を置く神です。人間はその限界の中で生きるものとして、活かされているのです。限界がある、ということは無限に人間の願いが叶い続けるとか、果てしない幸福、というようなものがない、ということです。中途半端な、納得いかない、時として不満足な現実の中で、人は生きる、ということです。ヨセフが立ち往生しているのは限界状

況にぶつかっているということです。ヨセフとしてはにっちもさっちもいかない。生きる、ということの根っこにはこういう事柄があるのです。

クリスマス、すべての人間の願いが満たされ、すべての人が幸福感に満たされる恵みが神から与えられた、というわけではありませんでした。それどころか、最初のクリスマスの当事者ヨセフは、過酷な現実と向き合うことになり、どうしたらいいのかわからず右往左往し、マリアの妊娠という出来事の中で、振り回され、蹲ってしまいました。

しかし、神はそのようなヨセフの不可解な現実のただ中に御子の降誕をお与えくださり、罪からの救いと、神が共におられることを、独り子を通してお示しになられた。「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。」ヨセフはうずくまっている中で、神の働きに頷いていきました。神がこの和達しの歩みの中で共にいてくださる、ということを受け取り始めていきました。ヨセフにとっての問題は、全て解けた、というわけではありません。しかし彼は罪を救い、共にいてくださる神のめぐみの中で、歩いていく、という思いを与えられていくのです。クリスマスは二千年前に起こった出来事です。しかし、ヨセフが不可解な現実の中で受けためぐみは、今を生きるわたしにも、まったく同じに与えられるめぐみなのです。